D 138　静岡県の児童の衣生活行動について
—Los Angelesの児童との比較による一考察　—

静岡大教育　大村知子　○池谷美子

目的　被服を調達した後の衣生活では、人と被服とは、被服と着る人・見る人・管理する人とによって成立っている。この「人と被服」との関わりについて、児童期から広く理解させることは意義があり、家庭科教育においても重要な課題であると考える。そこで、児童の衣生活意識について、生活環境との関わりなどの視点から実態を捉えることを目的として検討を試みた。本研究では、静岡県の児童の衣生活意識に関する実態を調査し、今回直接調査研究する機会が有ったLos Angelesの児童の衣生活意識との比較による考察を試みた。

方法　調査は次の３段階によった。①1988年 7月に実施した静岡県下小学校５年生76名を対象にした聞き取りと質問紙による調査　②1988年 8月から1989年 5月にかけて行なったアメリカ合衆国 Los Angelesにおける児童の衣生活の実態の観察調査と資料収集　③1989年 6月から10月にかけて実施した静岡県の小学校５年生男女1112名、Los Angelesの小学校５年生男女81名 合計1193名を対象にした、留め置き法によるアンケート形式の児童の衣生活意識と行動に関する26項目の質問紙調査。これらの調査資料を用いて、基本集計、クロス集計、相関分析等により解析した。

結果　静岡県の児童は、女子の方が男子より衣生活意識が高く、顕著な男女差がみられたが、Los Angelesの児童には、男女差がみられなかった。静岡県の児童は衣生活全体の事項において意識が消極的で、男子の意識は著しく低かった。特に、男子の関心と美的意識が低いことが分った。衣生活管理に関する意識は、両者の男女ともに高かった。正準相関分析やクロス集計の結果から比較すると、静岡県の児童は、関心が低い者は美的意識も低く、消極的な方向において相関関係が見られ、Los Angelesの児童では、衣生活に関心が高い者は被服に自己表現を依存する意識も高く、積極的な衣生活意識が形成されていることがわかった。